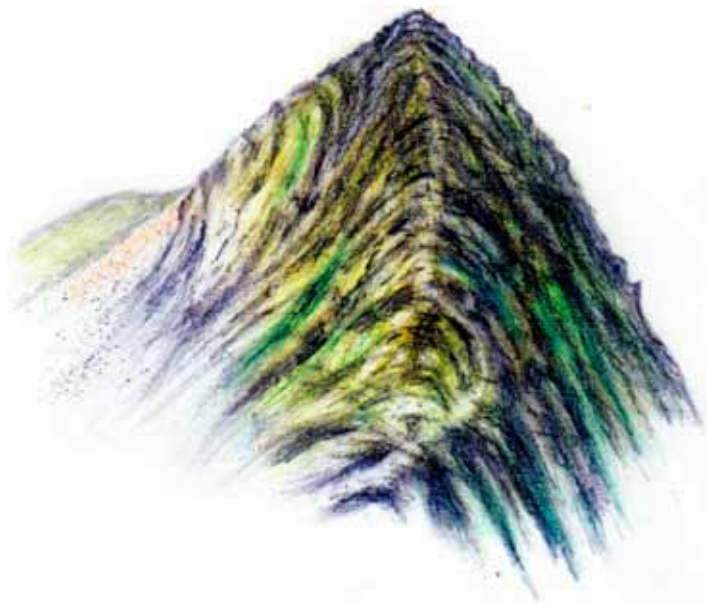


# あそ 9

2021



# 山巡り 須賀忠男



九重山 1787m  
大分県九住町の西部にある  
ミヤマキリシマ(ツツジ)が  
咲く頃どうしても見たくて決行!  
牧の戸峠から九重中岳のルートを  
坊ガツルの法華院温泉山荘  
に下り宿泊する。

あを

九月集

やうな

佐藤 竹僊

曲線にひかる和毛を春とする

ドイツの水フランスの水葛餅買ふ

ビニールのやうに懸かりし作り滝

たからかにみんなみんなと蟬時雨

なに色の裕なのかと若き母

あつといふやうなかたちの晝の月

暮夜といふ野暮なひびきや木枯忌



それぞれの夏

秋川 泉

野生馬と日傘の人と都井岬  
貴婦人の白きドレスや岬馬  
汗ばみてぐるり海原岬馬  
荒梅雨や眠れぬ夜を猫と居る  
遊びやめてぞろぞろくぐる茅の輪かな  
スクーター浴衣のひとがひらひらと  
自転車の提灯の火や迎盆  
足濡らし追うてもふはり蚩かな

底力

大日向幸江

卯の花や温泉街は今何処  
自肅中新じやが芋に足を止め  
おすそ分け手にチクチクと痩せ胡瓜  
線香の煙漂ふ扇風機  
水無月の一日二十日と打つワクチン  
巫女の所作見て潜りたる茅の輪かな  
爪に灯を点したやうな蚩かな



夏の越後

七郎衛門吉保

梅雨明けや越後せせらぎ声変る  
夏蝶の寄り道するや露天の湯  
初蝉のカナカナカナと坂戸山  
蜘蛛の囿にガサガサガサと奈落かな  
夏の池鯉も座禅の雲洞庵  
童心にかへる旅路のハンモック  
風受けて風を流して酔芙蓉  
音競ふ風鈴二種や玻璃と錫

七座句会

篠田純子

冷やし酒の瓶廻しけり七座ほくと句会  
蓮の葉のきみどりいろに裏がへる  
蓮の花うす桃色に透きとほる  
銀座吉兆解体開始梅雨最中  
空き物件管理物件朝曇り  
富士塚の溶岩の穴苔茂る  
ポポポッと小さきもも色花式部



机上旅行

篠田大佳

空想の旅のはじめの曹達水  
夏果や枕のそばの時刻表  
シエスタや架空列車の揺れやさし  
ポンチ絵の少年の錆び夏の浜  
東京はカルキのにほふ夏だつた



蝉時雨

須賀敏子

長梅雨をパール・バックの「大地」読む  
ワクチンを待つパイプ椅子梅雨晴間  
無観客それでも五輪蝉時雨  
小さき庭広き庭にも子のプール  
水打って時々花に独り言  
今朝も又藪萱草の土手を行く  
ロッカーは何時も端っこプールの日  
さっと来て桃一箱を置いて行き



コロナの注射

田中藤穂

見上げみる泰山木の花三つ  
いつしかに花消えてゐし美女柳  
差上げし「墨田の花火」根付きしか  
女学校の師の顔浮かぶ濃あぢさゐ  
病院梅雨コロナの注射の列につく



梅雨

長崎桂子

立葵未だ盛んな燃ゆる赤  
百日紅美しき亡き人想ふ  
青梅雨や色とりどりの花の海辺  
自然守る人人や浜昼顔の海辺  
葛餅を味はひ抹茶午後憩ふ  
塀の隙間を行来する蜂二匹  
線状降水帯起き梅雨の雷  
梅雨明けの日ざしに眩暈靴を買ふ



向日葵

森なほ子

向日葵に子らに背丈を越されけり  
花束は小さき向日葵勝者の手  
木も草も何か云ひたげ喜雨の中  
端居して晩年の蜜甘きこと  
十年経てなほ知らぬ路地夏の月  
青空のいつか暮れたる合歡の花



古民家ホテル

赤座典子

豪農の館を活かす避暑の宿  
回廊や柱の柄穴青葉風  
連れ立ちてせせらぎを行く鴨の首  
夏の蝶ひととき並ぶ池の縁  
初蜻蛉連れ立ちて寄る野天の湯  
風が出て頃合よしとハンモック  
大夕焼峰二つある坂戸山





# 焔収集

春風にのってゐるやう撞木杖 佐藤 喜孝  
ぷくぷくと出し巻卵梅雨に入る 赤座 典子  
草笛をうまく鳴らせと兄に急ぐ 秋川 泉  
おすそ分手にチクチクと痩せ胡瓜 大日向幸江  
芍薬の満面の笑み祖母の笑み 七郎衛門吉保  
四葩濃しコロナに変異の隠し技 篠田 純子  
夕焼けて長蔵小屋のラヂオかな 篠田 大佳  
妹はゆっくり話す文字摺草 須賀 敏子  
おそろしき今年の木々の茂りなり 田中 藤穂  
去年より狭くなりたり麦の秋 長崎 桂子  
振り返る石段急や夏の風 森 なほ子



紫陽花や見目良き時を鶴頸に 赤座 典子  
鳴き声は今朝見たかかほの雨蛙 秋川 泉  
素麺の喉につかへるお年頃 大日向幸江  
入道雲子供のやうな吾がをり 七郎衛門吉保  
妻の買ふ夕餉「父の日オードブル」 篠田 大佳  
しろがねの斜陽の街を梅雨が濡らす 須賀 敏子  
存へて久留米餅のアツパツパ 田中 藤穂  
句友来て楽しき今日や百合ひらく 長崎 桂子  
父の日や藍染にしネクタイ贈る 森 なほ子  
多摩川の治水記念碑梅雨に入る

喜孝抄



命日のころに咲く鉢日へずらす

佐藤竹僊

「鉢をずらす」にととても惹かれました。持ち上げずに、少しずらすことで、生前の人との関わり合いを感じます。「なんとなく」過ごしていた日常の延長として、「ずらす」行為は、自然な仕草と思いました。(純子)

夕焼が大きな音をしてをりぬ

佐藤竹僊

読者には、夕焼が音を出しているはずがないという常識がありますが、日没時に太陽を凝らして見ると、太陽の焼け付くような空に音がする心地がします。たしかに音は届いていません。しかし、あれだけ揺れていて音がしないはずがありません。しかし、太陽はどのような音がするのでしょいか。直感では、鉄板に物が当たった時の音を想像します。読者それぞれに聴覚の想像を訴えます。(大佳)

山国に母の生涯桐の花

森なほ子

作者のお母様の人生が山の中に反響し合っている印象です。上五中七のテーマに「桐の花」をどのように取り合わせたか、悩ましいところです。若かったり元気の良い桐には花が咲かないという

雑学から、適度にくたびれた老木と連想するのも良いですし、初夏の生き生きとした気分と取り合わせるのも良いです。季語の解釈で、作者の気分がいかようにも取れる句です。親子の情は一言では割り切れないことを示しているかのようです。(大佳)

薫風の釜石球場「逃げて」の碑

赤座典子

釜石球場の「あなたも逃げて」と書かれた石碑をご覧になって、感動された作者です。防波堤の様子、高台の住宅と、作者の句から、被災地の様子が伝わってきます。被災地に心を寄せて、幾たびも東北地方を訪問される、赤座さんご夫妻です。(純子)

桐の花山紫に覆ひけり

赤座典子

掲句の「桐の花」には、生き生きとした初夏の雰囲気が出ています。夏の青々しい山の彩りから、桐の花の紫を作者は強く印象したと強調します。生命力を表すであろう「紫」を、掲句のキーワードとして考えるとき、作者の心情として、紫を青として感じたのか赤として感じたのかを考える、赤を強調しているように思います。青から赤へ向かう情熱を掲句から読みました。(大佳)

ゆっくりと罌粟の日傘の遠ざかる

秋川泉

「罌粟の日傘」が上手く読めませんでした。白罌粟色の日傘を指すのか、モネの絵画「ひなげし」を指すのか。前者ならば鉄道の手窓から見た日傘を持った人を想像します。後者ならば、絵の中の

登場人物が、例えば美術館の動く歩道で進み、絵の中の人物が鑑賞者の視線の反対を向いている様子と読めます。いずれにしても、作者が自分の意思とは関係なく移動している様子を読み取り、そこに作者の名残惜しさを感じるのです。(大佳)

#### 木もれ陽を編み込むやうにレース針

大日向幸江

木漏れ日は四季に共通した語彙で、しかし、掲句では初夏のやさしい日差しを思わせる語感がしました。なるほど、「レース編む」が夏の季語で、木漏れ日を編み込むという比喻がレースの涼しい感じと相まって、初夏のイメージを読者に伝えます。レース編みのやさしさが読後にじわりと伝わってきます。(大佳)

#### 電線に揃ひ親待つ燕五羽

七郎衛門吉保

人間の住まいに営巣する野生動物たちは、人工物をよく活用しています。作者の目撃した燕が住む電線は危うげで、他の鳥に狙われたり、感電したりするのではないかなどと心配してしまいます。話は脱線しますが、世の中には電柱マニアや電線マニアなんて人もいるそうで、趣味が奪われるからか、昨今の無電柱化政策を憂っていました。なるほど、世の中から電柱や電線が無くなる可能性もあるのだなと思えば、尚のこと記録しておきたい風景です。(大佳)

#### Spotifyでジャズ難問数独解け涼し

篠田純子

音楽を聴きながら数独を解いている熱量は凄まじく、上五の字余りと並べられた名詞の羅列に暑さが表れています。そして、熱中していた数独が解けた時の涼しさに、カタルシスを覚えます。S音の韻 (Spotify、数独、涼し) が涼しさへ誘導していきます。(大佳)

#### 銀座の草引きて何かの幼虫出づ

篠田純子

草むしりも草引きと云へば別物のやうだ。銀座の草取りなら大した量では無ささう。「草引く」にふさはしい量だらう。草を抜いたら何だかわからない幼虫が根に絡まって出てきた。土地が純金と比べるほど高い銀座でも自然界の一部と云ふ証に純子さんはちょっと驚かれた。(喜孝)

#### ダンサーの笑顔に夏の昏さかな

篠田大佳

なぜこのダンサーは演技とはいえ、可笑しくもないのに笑えるのだろうか。無理しなくていいから……暑いし……疲れるし……見ていて窮屈になってきます。ギャラをもらうためか、センターを維持する為か、ついに懸命に踊る人の心に、昏さを感じてしまいました。(純子)

#### 桜まじ岡田かめやの非売品

篠田大佳

桜まじは古くは行楽時期の目安とされてゐたらしいと辞書にある。気の緩むはれやかさのある言葉である。銀座にあるおかめやは水商売御用達のお店。乾きもののパラダイスと聞く。さう云ふお店の非売品である。さぞやと思ふ。季語と相まっておしゃれな一句である。(喜孝)

夫の研ぐ包丁軽し夏に入る

須賀敏子

包丁を研ぐ音は、遠くから聞くと涼しげです。作者の夫君の研ぐ包丁からは、こたわって研いだ様子がうかがえます。手に軽いと来れば切れ味も良さそうで、誇らしげな夫君の様子が見えてきます。ほのぼのとした家庭の雰囲気と初夏の程よい暖かさが良く映え合います。(大佳)

闇匂ふ定家葛の咲く石堀

田中藤穂

定家葛について、定家の名前は、藤原定家が恋の未練を残して、恋慕していた式子内親王の墓に葛となって自らの蔓を巻きつけたという伝説に由来していて、六月頃に花を咲かせ、ジャスミンのような良い香りがする、というのが事典的説明です。

さて、掲句の「闇」は、闇に情念が絡みついて背筋がぞつとする印象もありつつ、定家葛の香りによって闇の恍惚を描いています。一方で、後段に「風立ちぬ青蔦揺るる石の堀」があり、こちらは連作の積み重ねもあって、光景の明るさの中に不安が見えます。作者は、人間の恍惚と不安を連作で示しています。(大佳)

庭石を覆ひ鮮やか草むしり

長崎桂子

「庭石を覆ひ」を庭石を草が覆っていると読んでみました。こう読むと、「鮮やか」が一気に草を

抜いて捗る様子を補強して、草むしりを終えた後の爽快感が伝わってきます。庭石を集めて一気に草むしりをしているとも読めて悩ましいですが、どう読もうと、労働の適度な疲労感と満足感が何よりも魅力的です。(大佳)

螢

魂の光

秋川泉

私の今日は湧き水の豊かな土地で蛍も飛び交っていた。夕方、蛍を捕まえたいと外に出ても、父も母も子供が捕まえる事は、蛇の目と目紛うからいけないと許さなかった。そして、私が親になって、横浜の寺屋ふるさと村近くに住んだ。谷戸に乱舞する幻想的な多くの蛍を忘れられない。どの蛍も美しかった。しかし、野坂昭如『火垂るの墓』のアニメの中の蛍を見てからは、蛍は胸が痛む悲しい魂の光になってしまった。



## 夢の中 大日向幸江

蛍を見なくなって何年たったのだからか。

蛍の時期になると私達家族の友人のお兄さんが蛍を取りに誘ってくれた。

小川の渚の草の中から光る蛍が私達を歓迎してくれた。眠くなるまで遊び帰りは夢の中だった。

「また」の言葉もなくお兄さんは何処かに消えた。

## 海の蛍 篠田大佳

小学校の臨海学校の時に、蛍が見られるというので夜の海へ行きました。どつやら蛍はいるようだけれども、ついに、体を灯すことはありませんでした。我々は宿舎の灯りへ帰っていきました。

## 蛍の墓 篠田純子

新宿区の馬場下町に住んでいたころ、隣のマー君は、うちによく遊びにきていました。マー君は5年生、娘は3年生、息子は幼稚園の夏休みに、みんなで「蛍の墓」のビデオを見たことがありました。見終わって「戦争は嫌だね」と私が言うつと、「あんな小さい妹が死ぬなんて俺嫌だ。」と言って、マー君は涙ぐんでいました。その後、マー君には妹が生まれて、それはとても可愛かったです。

マー君はうちの子どもたちを、いじめっ子から守ってくれたり、地下鉄の新線が出来ると一緒に乗りに入れて行ってくれたり…。いい兄貴でした。

## 蛍坂 田中藤穂

日暮里駅から御殿坂を上って夜店通へ降りてゆくところに蛍坂という坂がある。俳句仲間が夕暮れその道を歩いたことがあったが蛍には出遇えなかった。昔のような湧水も小さな川もなくなったので蛍もいなくなった。ある夜、裏のお寺の庭に二匹程光る虫が飛んできて「あ、蛍」と兄妹五人と母も一つの窓に集まって見ていたことがある。



咆哮  
満月やサッカ―場が咆哮す  
春一番大樹咆哮すると見る  
黄塵や中学生が咆哮す

彷徨

啓塾の土手を彷徨はや眩し

防災

傍らに防災リュック夜長し  
防災訓練兼ねて町内秋まつり  
防災の日の踏み切りの向ふ側  
台風禍防災訓練新採用  
雨風に蜘蛛防災か糸補強  
防災拠点委員任命春の地震  
啓塾や防災無線こだまして

帽子

禁煙の指のせかせか冬帽子  
夏帽子かぶれば別の顔になる  
冬帽子似合ひて遺影プロフィール  
冬帽子鉢のひらきし頭をかくす  
蓬髪のはみ出してゐる冬帽子  
浜松町小便小僧冬帽子  
コサツクの如く目深に冬帽子  
捨てられず色とりどりの冬帽子

竹内 弘子  
木村茂登子  
竹内 弘子  
長崎 桂子  
竹内 弘子  
篠田 純子  
中川句寿夫  
長崎 桂子  
七郎衛門吉保  
篠田 純子  
須賀 敏子  
後藤 志づ  
栢森 定男  
赤座 典子  
竹内 弘子  
栢森 定男  
篠田 純子  
栢森 定男  
河合 笑子

貝寄風や帽子飛ばして納骨す  
白帽子今日は諦め旅の夢  
露座仏を見上げる子等の夏帽子  
あの雲も旅の途中か夏帽子  
冨に涙とばして深帽子  
児とうたふ柿の綿帽子窓の外  
五十九や久留米緋の夏帽子  
河船の往き来見てゐる冬帽子  
ぶかぶかの帽子と靴で花堤  
いつの世も踏切に居る夏帽子  
霧を抜け糸の帽子輝きぬ  
図書館へ行きも帰りも冬帽子  
新しき糸の帽子地蔵尊  
ビル風くもり硝子に帽子当つ  
ちらほらと帽子ぬぎ捨て柿若葉  
白をもて会津に入らん夏帽子  
術もなく終わりに勝負夏帽子  
七人の小人の帽子唐辛子  
通学路見守る人の冬帽子  
帽子編むときにいびつな母の愛  
哀しみを半分隠す冬帽子  
吟行始綿帽子拝す三社様  
念願の帽子を買ひし木の芽時

後藤 志づ  
須賀 敏子  
鎌倉喜久恵  
吉成美代子  
鎌倉喜久恵  
江倉 京子  
須賀 敏子  
後藤 志づ  
赤座 典子  
赤座 典子  
森 理和  
芝宮須磨子  
森山のりこ  
佐藤 恭子  
渡邊 友七  
堀内 一郎  
赤座 典子  
木村茂登子  
早崎 泰江  
篠田 純子  
須賀 敏子  
赤座 典子  
山莊 慶子

自販機の銀座になくて夏帽子  
椅子あれば座つても見し夏帽子  
小さき庭草取る帽子鏝広し  
山車を曳く子に付き添へり夏帽子  
オペラハウスへさようなら夏帽子  
何時の間にか古りてゆくもの冬帽子  
冬帽子生きることから考へる  
園の児の黄色の帽子いぬふぐり  
桜東風赤子の帽子ずらしをり  
野辺歩き遠き会釈の夏帽子  
飾り窓の帽子の疲れ夕かなかな  
冬帽子目深に被り最晩年  
逆らへば帽子持去る春の風  
海風に一瞬に飛ぶ春帽子  
大きめの帽子重たげ入園児  
吟行といふ小さき旅夏帽子  
近頃は忘れ癖つき春帽子  
水生花園見え隠れする夏帽子  
賑はしき空港ロビー夏帽子  
蛸焼も優勝セール冬帽子  
少し鬱目深にかむる冬帽子  
春浅し帽子美人と言はれけり  
ばらつきてなにはなくとも冬帽子

齊藤 裕子  
堀内 一郎  
赤座 典子  
木村茂登子  
堀内 一郎  
芝 尚子  
篠田 純子  
長崎 桂子  
齊藤 裕子  
鎌倉喜久恵  
田中 藤穂  
堀内 一郎  
長崎 桂子  
吉成美代子  
須賀 敏子  
芝 尚子  
鈴木多枝子  
齊藤 裕子  
吉成美代子  
赤座 典子  
木村茂登子  
堀内 一郎  
長崎 桂子

通学路見守る人や春帽子  
こちよく被れる春の帽子欲し  
杉苔のあたまをなでる夏帽子  
つば広の帽子かぶつて夏の風  
郵便でとどく形見の夏帽子  
蕎麦食べて忘れてきたる夏帽子  
曼珠沙華まだ夏帽子手離さず  
思ひ出をかかへすぎたる冬帽子  
散る花を帽子の中へ受けにけり  
秋の汗帽子に塩の絵柄書く  
いろいろの思ひしみに冬帽子  
擦れ違ふ乳母車にも冬帽子  
冬帽子かすめて烏とび去りぬ  
夏帽子今日一日を日本橋  
藁帽子かぶりて楚々と冬牡丹  
下り坂帽子を飛ばす神渡し  
鯛雲園児の列の黄の帽子  
黒南風や帽子おさへて橋渡る  
空がきれいと独りごちをり冬帽子  
ふかぶかと変身願望冬帽子  
団子屋に課外授業の夏帽子  
メジャーリーグの帽子の届く父の日に  
鬚髭の似合ふ男の冬帽子

早崎 泰江  
早崎 泰江  
佐藤 恭子  
吉成美代子  
竹内 弘子  
田中 藤穂  
遠藤 実  
田中 藤穂  
鈴木多枝子  
長崎 桂子  
芝 尚子  
森山のりこ  
鎌倉喜久恵  
須賀 敏子  
吉成美代子  
長崎 桂子  
長崎 桂子  
竹内 弘子  
田中 藤穂  
早崎 泰江  
赤座 典子  
須賀 敏子  
木村茂登子

あとがき

## 短文のお題「柿」

「柿」は年中楽しめる。枯木から噴き出す芽や若葉の鮮やかな翠。青い実がつき秋には日本全国を飾るあの柿の色。枯木の枝ぶりも気に入っている。果実の美味は云々迄もない。

## WEB校訂

今月はよんどころなく省略させていただきます。

## 編集部移転

十月より左記の住所に原稿お願ひします。ファックスはしばらく使へません。投稿は郵便、メール、またはメールに画像添付で願ひします。

〒177-0042

東京都練馬区下石神井二丁目六の三

サンハイツ石神井Ⅱ 一階

この移転のため時間が取れず「はしたて集」は次号に掲載させていただきます。

住所表記間違へではと疑問もたれる向きもおありかと思ひます。戸建ての一階と二階戸分けた賃貸住宅です。で見かけない表記になってます。薄いブルーの家です。スーパーも講演も近くにあり孫たちにも近づきました。  
(喜孝)

二〇二一年九月号

発行日 九月十四日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)